

# 高山明

そこ [で・に] 生きるための、知のありか。

## フィールドワーク・セッション

《東京ヘテロトピア》2013 ©Masahiro HASUNUMA

2015/06/25/Thu  
at Matsuda Lab.

「フィールドワーク」とは、何だろう。

このレクチャー・シリーズ（予定）では、諸分野の前線から（広義の）“フィールドワーカー”をお迎えし、これまでの活動や足跡について語ってもらうと共に、その「フィールド」の見だし方や読み解き方、そしてそのフィールドを通じて捉えられる《世界》についてディスカッションを行う。

# #2

Lecture 高山明

10:30-  
12:00

演劇を考える／演劇で考える

Session 高山明 松田法子

12:00-  
13:00

上演と都市 都市とヘテロトピア  
もの「語り」による都市



高山明（たかやま・あきら）

1969年生まれ。演劇ユニットPort B代表、立教大学現代心理学部特任准教授。

ツアー形式のパフォーマンスや社会実験的プロジェクトなど、演劇の可能性を拡張しながら現実の社会や都市に接続する試みを行っている。

主要作品に「個室都市東京」（2009）、「完全避難マニュアル 東京版」（2010）、「国民投票プロジェクト」（2011）、「東京ヘテロトピア」（2013, 2015）など。

かつての活動拠点であるドイツを始めとして海外での作品制作・発表も精力的に行っている。

# フィールドワークセッション

そこ〔で・に〕生きるための、知のありがた。



上段左《東京ヘテロトピア》(2013) 右《個室都市東京》(2009) 下段左《サンシャイン62》(2008) 右《東京/オリンピック (はとパスツアー)》(2007) ©Masahiro HASUNUMA

2015/06/25/Thu  
at Matsuda Lab. 10:30-13:00

ある都市で道が分からないということは、大したことはない。だが、森のなかで道に迷うように都市のなかで道に迷うには、修練を要する。この場合、通りの名が、枯れ枝がポキッと折れるあの音のように、迷い歩く者に語りかけてこなくてはならないし、旧都心部の小路は彼に、山あいの谷筋のようにはつきりと、一日の時の移ろいを映し出してくれるものでなければならない。この技術を私が習得したのは、ずっとのちのことである。

(ヴァルター・ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』)

高山明 ◇略歴

- 1969 生まれ
- 2002 演劇ユニット PortB (ポルト・ビー) 結成
- 2007 「東京/オリンピック」(PortB)
- 2008 「サンシャイン62」(PortB)
- 2009 「個室都市東京」(フェスティバル/トーキョー09秋)
- 2010 「完全避難マニュアル東京版」(フェスティバル/トーキョー10)
- 2011 「国民投票プロジェクト」(フェスティバル/トーキョー11)
- 2012 『はじまりの対話 -PortB「国民投票プロジェクト」』現代詩手帖特集版, 思潮社
- 2013 「東京ヘテロトピア」(フェスティバル/トーキョー13)  
一般社団法人「Port 観光リサーチセンター」設立
- 2014 「横浜コミュニティ」(横浜トリエンナーレ2014)
- 2015 「東京ヘテロトピア」

ベルトルト・ブレヒトは死ぬ間際にこう言っていた。われわれは演劇をもっと小さくしなければならない。演劇を小さくすればするほど、社会のなかに浸透させることができる、と。私はさらにその先を行きたいと考えている。つまり、演劇を消すこと。社会のなかに忍び込んだ演劇は、日常生活のなかで徐々にその痕跡を消していき、社会や都市の機能になる。この「演劇でなくなった演劇」を通して、われわれは普段出会わない人に出会い、いつもは聞かない声を聞き、決められたルートから外れて迷子になることができるようになる。そのとき、私たちは新しい「経路」を見だし、既存の秩序は揺さぶられるだろう。

高山明